

vol.4 2022

谷崎記念館だより

学芸員エッセイ

潤一郎あれこれ

文豪谷崎の大衆小説 ― 戦国大活劇「乱菊物語」 ―

時は戦国、舞台は播州の港町室津（現兵庫県たつの市御津町）。遊女たちが艶やかに練り歩く「小五月祭（こごつきまつり）」もたけなわの中、遊女「かげろう御前」をめぐる恋のさや当てがからむ、中国渡りの珍宝の争奪戦。土地の領主や武者・海賊、果ては妖しげな幻術師まで入り乱れ、祭りの華やきを背に剣戟（けんげき）の音も高く、丁々発止の大活劇が繰り広げられるのであった……。

「乱菊物語」は、血沸き肉踊る波乱万丈の戦国エンターテインメント、フィクション性豊かな「空想時代小説」である。日本画の巨匠北野恒富の挿絵も躍動感にあふれ、ハラハラドキドキの物語に彩りを添える。

大正期以降、第一次世界大戦を背景とする好景気の中で、近代化の進行と都市社会の成熟とともに、読書・出版文化の社会的な裾野が画期的に広がっていった。1冊1円（今なら3～4000円くらいか）と、従来に比べ安価で手軽に手にとれるようになった「円本」の大ブームが象徴するように、多くの人々が本を買って読むようになってきたのである。一方、作家の側も、印税によって生計を立てることができるようになってきた。そして、こうした動向を背景として、日本の「大衆文学」もようやくその姿をあらわしてくる。昭和5（1930）年に新聞連載の始まった「乱菊物語」は、そんな新しい文学の勃興を好意的に受けとめた、谷崎じしんによる大衆小説であった。

文豪にとって、新たな挑戦でもあったこの作品。が、そこには、そもそも虚構を操る「ものがたり」の作家としてデビューした、谷崎の真骨頂がむしろよくあらわされている。稀代のストーリーテラー谷崎、面目躍如の一篇といったところか。一方でまた、その荒唐無稽な内容が、現地での綿密な取材にささえられているということも、谷崎の執筆流儀を示していて興味深い。

諸事情あって、連載は前編で中断したものの、手に汗握るスペクタクルな大活劇は読みごたえ十分。中断はかえすがえすも惜しまれるが、その思いは谷崎も同じだったらしく、晩年も続編執筆を模索していたといわれる。

芦屋市谷崎潤一郎記念館 井上勝博

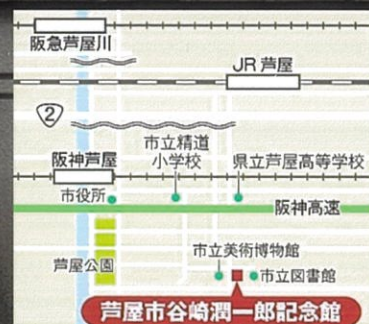
谷崎記念館だより 2022

2023年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>

交通

徒歩 阪神芦屋駅から南東へ15分

バス ・阪急芦屋川駅
・JR芦屋駅
・阪神芦屋駅

いずれも「緑町」下車、東へ徒歩1分

駐車場
隣の美術館 20台、図書館 47台

渡辺明宛書簡

芦屋市谷崎潤一郎記念館

第36回 残月祭

長谷川櫂氏 講演会

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う『残月祭』。新型コロナウイルス対策を万全に施し、例年どおり7月24日に芦屋ルナホールにて開催、151名の観衆が集った。

今回は、朝日俳壇の選者で俳人の長谷川櫂さんに、「陰翳礼讃」をテーマにご講演頂いた。本作に描かれた、日本建築などに見られる陰翳の美は、晩年、明るい書齋を好んだ谷崎の実生活に即したものではなく、フィクションであると指摘された。さらに、「和」について、外来の異質なものを日本の気候や風土などに合わせて作っていく運動体であると捉えた。その上で、作品が発表された昭和8年という国粋主義が跋扈し出す時期に注目し、「陰翳礼讃」は日本文化について書かれた名随筆ではなく、純粋な固定された日本があるという文化への幻想がこの時期に生まれており、そうした時代の空気を図らずも描いた点に、本作が名随筆と言われるゆえんがあるとの見解を示した。

作品のポイントとなる箇所には朗読家 内海同仁さんの朗読もあり、長谷川櫂氏による独自の「陰翳礼讃」論に、観衆は熱心に聴き入った。

陰翳礼讃

とは何か

中公文庫「陰翳礼讃」
谷崎潤一郎著 中央公論新社



光と闇が織り成す伝統的な日本の美を論じた随筆

谷崎家の雛人形



寄贈資料紹介

谷崎が娘の鮎子のために用意した、丸平（大木平蔵）の雛人形。昨年1月に谷崎のご令孫・高橋百子様からご寄贈頂いた。昨年春、展示室にて初公開し、多くの方々からご好評頂いた。制作時期は不明だが、大正12（1923）年の関東大震災を契機に関西に移住した谷崎が、阪神間に居住後、発注したものと思われる。谷崎は昭和5（1930）年に千代と離婚、千代は佐藤春夫と再婚した。鮎子も東京の佐藤宅で暮らし、昭和14年に佐藤の甥竹田龍児と結婚、一男二女をもうけた。雛人形は孫たちに受け継がれ、戦後も自宅で段飾りにし、桃の節句を祝った。

江戸時代創業の京都「丸平大木人形店」は、代々、当主が大木平蔵を襲名、「丸平」の名で親しまれた。多くの皇族・華族にも愛され、谷崎は「細雪」でも、芦屋に住む時岡家の雛人形として登場させている。

春の特別展

2022年4月2日（土）～7月24日（日）

谷崎とおんな 谷崎のおんな

Tanizaki with The Women

～女性に縁どられた文豪～

女性とその美に終生関心を寄せつづけ、描きつづけた谷崎潤一郎。80年にもおよぶその生涯の道のりを、様々な女性たちが行き交っていった。想いを抱きつづけた美しい母、三人の妻たち、お気に入りだった女優……。名作のモデルとなった女性も多い。

いつも多くの女性とともにあった谷崎。「フェミニスト（女性崇拝者）」であることを自認し自負してもいた谷崎。数々の女性たちによって縁どられた文豪の肖像はいかにも花やかにみえるが、その表情は思いのほか



母 関

に複雑である。

女というものは神であるか玩具であるかのいずれかである。「蓼喰う虫」の主人公が吐露したこの心境は、谷崎じしんの胸中でもあっただろう。この謎めいた言葉が物語る女性との関係性は、はたしてどのようなものだったのだろうか。

女たちのからまりあう眼差しに照らされて、ようやく人として作家としての谷崎の輪郭が浮かびあがってくる。「女性なるもの」と文豪との、そして、その作品世界とのかかわりに光をあてた。



晩年の「女神」渡辺千萬子

潤一郎人間まんだら

ロビーパネル展

谷崎潤一郎は、関東大震災で関西に逃れたこともあってか、いわゆる文壇での人間関係には、一步距離をおいていたところがあった。

一方で、多彩な人々との交わりは広く、その繋がりにまつわるエピソードや背景にも、興味深いものがある。

ある人が、いつどのような人と、どのような交わりを結ぶのか。それは、その人の生きてきた道のりにもひとしく、人生そのものともいえるだろう。

文豪谷崎の生涯を縁どった人々との繋がりを跡づけた。



昭和5～6年頃
俳優の上山草人と



昭和2年 神戸港にて
中国の友人たちと

2022.4 - 2023.3

芦屋市谷崎潤一郎記念館